

# 女子部が行く!

学会探訪記

## 第4回 デジタルプラクティス編集委員会

—酷暑の東京よりまだアツイ!—



レポーター 野田夏子 (芝浦工業大学)

今回の女子部のお邪魔先は「デジタルプラクティス編集委員会」。デジタルプラクティス、以前にぱらぱらと眺めたことはあったけれど最近はまだあまり見ていなかったなあ、デジタルプラクティスってそもそもどういう意味なんだろう、と思いながら、2015年7月31日夕刻、編集委員会が開催される御茶ノ水は化学会館（学会事務局の入っている建物）の会議室へと向かった（すみません、プロの記者ならきちんと下調べをしてから向かうところですが、ここは柔軟に縦横無尽に活動することが身上の女子部、まずは現場に潜入です！ちなみにこの日、東京都心の最高気温は35度、連続猛暑日6日目、とにかく冷房の効いた場所へ、という気分であったことも認めます）。

### 世に開かれた「デジタルプラクティス」

編集委員会の開始は18時であるが、会議の前にお話を伺うべく、少し早めにお集まりいただいた。暑さをものともせず、続々と委員の皆さんが会場に到着する。まずは編集委員長の吉野松樹氏に、編集にあたってころがけていることなどを伺った。



吉野編集委員長にインタビュー

4月に編集委員長に就任したばかりで、と少々照れくさそうな吉野氏、「ころがけていることは？」という質問に、「とにかく読者の皆さんに興味を持ってもらえるような特集号のテーマを見つけること」。インタビューの最中も、何度か「皆さんに興味を持ってもらえるテーマ」とおっしゃっていた。このテーマ探しがこちらの思う以上に難しいということが追々分かってくるのだが、それはまた後ほど。特集号と聞いて、不勉強な私は、何回くらい特集号を発行するのか、と聞いてしまったところ、すべてが特集号である、とのこと。ということで、ここでデジタルプラクティスのいろはをご教授いただいた（表-1）。

編集委員長の発言にあった「皆さんに興味を持ってもらえる」の「皆さん」であるが、これは文字通り、広く「皆さん」なのである。Apple Newsstandや日経BP社のWebサイトITproで公開し、会員以外の皆さんにも読んでいただくことを期待している。ちなみに、Newsstandのアプリダウンロード数はこれまでに4,557、定期購読者は933（2015年7月12日現在）。また、読者だけでなく、論文投稿

・プラクティス（実践）に関する論文誌。
・対象は世のすべての実務者。会員でなくても無料で読める、投稿できる。
・情報学広場、Apple Newsstandで公開（2014年4月発行号以降、紙媒体はなし）。
・年4回発行。すべてが特集号。
・特集号招待論文、特集号投稿論文、（特集号テーマ以外の）一般投稿論文を掲載。
・特集号テーマに関する座談会、グロッサリも収録。
・記事を日経BP社のITproにも掲載。毎週金曜日更新。ただし1年遅れ。
・デジタルプラクティスのほかに、無査読のDPレポートも刊行。

表-1 いまさら聞けないデジタルプラクティスのいろは

者も会員に限定されない。文字通り、世に開かれている。

## アツイ編集委員会のスタート

それでは、編集委員会の様子をご紹介します。

編集委員会は月1回（8月を除く）開催される。編集委員は編集委員長含め22名、この日は6名が会場で参加し、1名はSkype経由で参加した。手元には、今後の発行スケジュール、前回議事録、各号の進捗状況をまとめた表、査読結果に関する編集委員会のメール審議の集計結果等、分厚い資料が用意されている。

まずは来年某月刊行の特集号について議論が始まった。

「これ、原稿来ます？」

「〇〇先生のは、たぶん大丈夫です」

「ほかは、ちょっと音信不通になっているものもあって」

招待論文の進捗状況の確認なのだが、少々状況はシリアスな模様。本特集号テーマは、聞けば皆さん納得の今話題のあれ。まさに、編集委員長が言うところの「皆さんに興味を持ってもらえるテーマ」だ。しかし、そのテーマに関して十分な実践が存在するかというと、まだ世に出て若い技術のため少々難しいらしい。

「みんな注目しているんだよね、でもプラクティスを集めるのは難しいね」

そんな難しいテーマについて、しかし委員諸氏は皆さんに興味を持って読んでもらえるものにし

ようと、真剣に議論を続ける。

「(座談会のための) インタビュー、誰がインタビューしますか？ 編集委員でこのテーマに詳しいのは...」

「誰にインタビューします？ 〇〇さんは、どこの人でしたっけ？ 地方だとインタビューは難しいよね」

「FITに行くんで、その帰りにインタビューに行きましようか？」

なんと、地方にまでインタビューにいらっしゃると言う。「グロッサリは、それでは編集委員がキーワードをピックアップして...」。編集委員の仕事は、単に論文の査読をして掲載可否を決めるだけではない。ときには地方にまで出向いてインタビューをしたり、グロッサリを作ったり。これは相当に大変な仕事だ。

## プラクティスとは？

熱い意見の交換をしつつも、委員会は淡々と進んでいく。なんと約1年後刊行の特集号までテーマが決定している。そのそれぞれについて、進捗状況の確認を行う。まだ先の刊行の場合、全体の担当者やゲストエディタの決定なども議題になる。デジタルプラクティスでは共同推敲という独特のプロセスがあり、執筆者は割り当てられた編集担当の指導や助言を受けながら推敲作業を進め、読者にとって分かりやすい論文とすることができる。編集担当は編集委員や査読者が当たるが、この編集担当の決定も編集委員会で行われる。

特集号についての議論が終わると、次は一般投稿論文の採否の審議だ。ここでは、査読者による査読結果と、それに基づく各委員によるメール審議の結果を踏まえ、採否についての合意を取る。なかなか現場から外に出て来にくい実践の報告を読者に届けよう、そのためにはどうにかして採録の方向に持っていこう、という各委員の思いが伝わってくる。中には、修正・再査読のプロセスを繰り返し、2次審査4回目などというものもあった。

「プラクティスとしては、とても良いものが入っていますよね」



編集委員会の様子

「読みにくい部分もあるけど、共同推敲で論文としてのレベルは上がりますよね」

「共同推敲は編集委員から人を出しても良いですから、ということで査読者にも納得してもらいましょう」

もちろん闇雲に採録しているわけではない。役に立つプラクティスを読者に届けよう、という編集委員会の強い思いがそこにはある。そこで議論になるのが、プラクティスとは何か、ということだ。単なる実践例の報告ではない。ほかの人が似たようなことをしようと思ったときにきちんと参考になるもの、抽象化・一般化されていて客観性があることが必要であり、社会的な有用性が必要になる。

「こういう実践例はなかなか出てこないから貴重だと思うけど、やっぱり有用性が書いていないとプラクティスとして通すのは難しいでしょう？」

「でも、有用性はなかなか明確には書けないですね」

デジタルプラクティスが求める「プラクティス」とは何か。議論がひとしきり盛り上がった。また、これを投稿者に分かりやすく伝えるため、投稿案内の Web ページの表現の変更についても議論された。

## 縁の下の力持ち—事務局

編集委員会最後の議題は、次に取り上げるべき特集号テーマ。今話題のあれこれ、これまでのテーマで評判が良く再登場させてもよさそうなもの、など候補が挙げられていく。この場では意見が出尽くさないようなので、メーリングリストでさらに候補を募り、ある程度候補が出たら次回の委員会で決めよ



編集委員会に出席の事務局の皆さん

うということになった。メーリングリストでの議論を始めるために、編集委員長から事務局に「メールを出しておいてください」という依頼があった。

そう、本日の熱い編集委員会を語るのに外せないのが事務局の皆さん。資料を準備するだけでなく、委員会にも出席し、進捗状況を報告したり、議論すべき事項をリマインドしたりと、委員会の進行を陰で支えている。

「〇月に刊行するためには、×月までに初稿が上がっている必要がありますので、少なくとも～までには CFP が出ていませんと」

スケジュールもしっかりと頭に入っていて、要所所で委員諸氏に情報を提供。この事務局の皆さんなくしては、デジタルプラクティスを読むことはできないようだ。

## お知らせ、そして...

最後に編集委員会からのお知らせがあるそうだ。「来年3月の全国大会で、デジタルプラクティスの最近の特集テーマから厳選したテーマについてその著者にご講演いただく、ということ企画中です。ぜひお越しください」

20時過ぎに委員会が終わり外に出ると、まだまだ昼の暑さが残っていた。それにしても、編集委員の皆さんの思いの熱さはこんなものではなかった。そのことに感動するとともに、ちょっぴり心配もする。業務で忙しい中で招待に応じて招待論文を書く著者の皆さん、無報酬で何回もの査読を引き受け、場合によっては共同推敲までする査読者の皆さん、このアツさに当てられてバテてしまったりはしないかしら。でも、編集委員会の熱い思いの結晶のデジタルプラクティスがたくさんの皆さんに読まれ、良いプラクティスの書き方が多くの人に共有されるようになれば、だんだんと良いバランスになっていくのだろう。より多くの方に読んでいただき、またより多くの投稿がありますように。

(2015年9月13日受付)